

まいど！ざいむ局です！

関西元気企業

～昔のように元気な町を～

今回ご紹介するのは、京都府与謝郡伊根町に所在する舟屋の宿 鍵屋です。

丹後半島の北東部に位置する伊根町は人口2,000人ほどの小さな町で、漁業の町として栄えてきました。海沿いには1階が舟の格納庫、2階が居室となっている舟屋が約230軒立ち並び、その独特で美しい風景は国の「重要伝統的建造物群保存地区」に指定されています。

漁業のほか、料理民宿による観光業も町の重要な産業でしたが、高齢・過疎化による後継者不足などで廃業が相次ぎ、かつての活気は失われつつありました。



舟屋の風景

そんな中、伊根町出身の代表がUターンして舟屋民宿を開業したのは平成21年。1日1組限定のおもてなしや体験型観光に力を入れ、観光客に大人気となっています。

また、現在は代表が中心となり、町と地元住民が一体で、地域活性化のための観光交流施設の設置計画を進めています。「昔のように元気な町になってくれたらいいな」という思いで活動されている代表の現在までの道のりや地元への思いに迫ります。

企業情報

名称 舟屋の宿 鍵屋
所在地 京都府与謝郡伊根町字亀島 864
設立 2009年 代表者 鍵 賢吾
従業員 2名
H P <http://www.ine-kagiya.net/>

●代表の経歴を教えてください

伊根の漁師町で生まれ育ちましたが、高校を卒業するに際し、「都会に出てみたいなあ」という思いだけで町を飛び出し、友人の紹介で京都市内のホテルのレストランで下働きを始めました。

その後、祇園の小料理屋や京都・錦市場の魚屋など色々なところで働きましたが、飲食業の世界で働くうちにどんどん楽しくなってきた、いつか「将来は自分で店をやりたい」という思いを持つようになりました。

そんな時、知り合いの寿司屋の大将からの「自分の店をやりたいと思っているなら、とりあえず20代のうちに一度はやっておけ。若ければ、失敗してもなんとかなる。」という言葉に押され、23歳にして開業を決意。妻の実家がある茨城県でカフェを開業しました。



舟屋の宿 鍵屋 鍵賢吾代表と美奈夫人

●なぜ伊根町で民宿をしようと思われたのですか

家出同然で地元を飛び出したものの、長い間都会で生活していると「伊根は自然豊かで良いところだったな」と思うようになり、いつかは帰ろうと考えていました。そして平成20年、父の病を機に家族を連れてUターンすることにしました。

伊根で生活するにあたっては、子どもの頃から釣りが好きだったこともあり、釣り船と料理店をしようと考えていましたが、商工会に相談に行ったところ、「ぜひ民宿をやってもらいたい」との提案をいただきました。聞けば、最盛期には40軒ほどあった民宿が当時5軒ほどまでに激減しており、商工会としても頭を悩ませているとのことでした。

とはいうものの、私たちは旅行の経験がほとんど無かったですし、ましてや民宿というものに泊まったことなどありませんでしたので、本当にやっていけるだろうかという不安がありました。しかし、「子どもの頃のように元気で楽しい町になって欲しい」という思いや、「伊根の楽しさを体験してもらいたい」という思いが強かったため、舟屋民宿の開業を決意しました。



民宿内からの景色

●開業にあたり工夫されたことはありましたか



釣り体験を楽しむ観光客

私たちは民宿というものに泊まった経験が無かったので、「それならば自分たちが泊まりたいと思う民宿を作っていこう」というコンセプトでスタートしました。

一番こだわったのは料理で、食材が「一番おいしいタイミング」で提供するようにしました。例えば甘鯛の刺身は絞めてから4時間後が一番おいしい。こういうのは、漁師町の民宿だからこそ出来ることで大変好評です。

また、せっかく伊根に来てもらったからには実際にこの美しい海に触れてもらいたい。そんな思いから、お客さんには釣りや海上遊覧などの体験をしてもらっています。

ちなみに、自然の中でゆっくりしてもらうため、宿泊は1日1組限定です。それだけ従来の民宿よりは高い価格設定となりましたが、多くのお客さんがリピーターになってくれているのは、伊根の自然や生活を体験して、その楽しさをわかってもらえたからだと思います。

●伊根町の観光活性化に向けてどのような課題がありましたか

伊根町は近年観光地として注目を浴びているにも関わらず、受け入れ体制に三つの大きな課題がありました。

一つ目は、飲食店が少ないことです。道の駅を除くと、町内に飲食店は4軒しか無く、そのうち夕食を提供していたのはわずか1軒のみでした。さらに、民宿でも素泊まりのみのところも多く、半数以上は夕食を提供しません。これは、少ない人手で少人数のお客さんのために買い出しから調理、配膳、片付け…と全てをこなすのは時間と労力が非常にかかるためです。そのため、伊根を訪れる観光客は新鮮な魚介類に期待してやって来るにも関わらず、場合によってはコンビニで買った弁当を食べざるを得ないという悲惨な状況でした。

二つ目は物販店が少ないことです。町内にお土産物店は1軒しか無いですし、地元の人魚介類を直接港に買いに行く習慣があるため、魚屋は1軒もありません。せっかく自然の恵み豊かな町なのに、観光客が地元の食材等を買う場所が身近に無かったのです。

三つ目は、観光の拠点が無いことです。一般的な観光地であればインフォメーションのようところがあって、そこで見どころやルートのご案内をしたり、お土産を売ったりしています。しか

し、ここではバス停から離れた高台に道の駅があるものの、舟屋群の中に観光の拠点となる施設が無く、観光客からは「舟屋の街並みのどこをどのように見て回ればいいかわからない」という声が多数寄せられていました。実際、日帰りのお客さんのほとんどは道の駅と遊覧船のみで観光を終えてしまい、伊根での滞在はわずか1時間程度というのが実状でした。

●来春オープン予定の交流施設とはどのようなものですか

「せっかく伊根に来てくれるお客さんにじっくりと深く伊根の魅力を知ってもらいたい」。そんな気持ちで我々地元経営者をはじめとする住民が立ち上がり、前述の課題を解決すべく町と協力して始めたのが交流施設の建設計画でした。

交流施設は舟屋群の中に建設し、施設内には、飲食店、物販店、インフォメーション（体験型観光の窓口）という、これまで足りなかった施設が全てオープンする予定です。



交流施設のイメージパース（実際に建設する色合いとは違います）

●交流施設建設の狙いはどのようなものですか

これまで高台にある道の駅や遊覧船の上から舟屋群の遠景を見るに留まっていた観光客が舟屋の街並みの中に流れてきてくれることを期待しています。

交流施設内の飲食店（寿司屋とカフェ）では、伊根で採れる新鮮な食材を使った料理を楽しんでもらい、そこで使っている食材やお土産物を隣接の物販店で販売。そして何より、実際に舟屋の街並みを歩いて見て回ってもらうことで、観光客により満足してもらうことを目指しています。



カフェ・物販棟の完成イメージ

また、住民が気軽に集まってお茶を飲んだり話をしたりできる場所が今までは無かったので、この交流施設が住民の憩いの場として地域の拠点となることも期待しています。高齢化が進むこの町では、毎日住民同士が顔を合わせてコミュニケーションをとることはとても大切なことですし、住民が交流施設を利用することによって、観光客との交流も生まれたら良いですね。

交流施設の建設は町によって行われますが、その運営は我々地元住民が設立した新法人が行います。

一般的にこのように「公設民営」のケースでは、ま

ず行政が建物を完成させた後に運営者を募集することが多いようですが、この交流施設は、施設の設計段階から住民の声が取り入れられており、まさに町と地元住民が一体となって計画を進めています。施設は平成29年4月のオープンに向けて現在建設中で、今後どのようにアレンジしていくかは地域の声を聴きながら、みんなで協力して作り上げていけたらと思っています。

●地方創生への思いをお聞かせください

地方創生という言葉はよく聞きますが、現場ではあまりイメージがわからないというのが正直なところです。大切なのは、行政だけで決めるのではなく、地域の声も積極的に吸い上げてもらう

ことだと思っています。

今回の交流施設の建設事業は、京都府が推進する「海の京都」事業の最初の会合に私が参加した際に、当時の副知事に伊根の現状を直接訴えたことがきっかけとなりました。その方は真摯に話を聞いてくださり、その中でかねてより妻と「こんな施設があったらいいね」と話していたこの交流施設の構想を話したところ、賛同をいただき、多大な支援を得て実現するに至りました。私たちは運が良かったですが、日本全国を見ると地域の声がなかなか届かないところも多くあると思うので、行政にはぜひ地域の本当の声を感じて欲しいです。

●今後の目標をお聞かせください

昔のように元気な町になってくれたらいいなと思います。そして、そのためには私たち大人が楽しく生活することが大切だと思っています。高齢・過疎化が進む小さな町ですが、大人が楽しく生活していれば、子どもたちも「あんな風に来たらいいな」と思って、将来、町に残ったり、一度都会に出ても戻ってきてくれるかもしれませんからね。

いずれにしても、今回、交流施設が出来ることによって少しでも町が元気になれば、これほど嬉しいことはありません。より良い施設となるよう、地域の声を聞き、住民一体で取り組んでいこうと思っています。

<取材後記>

「初めての体験です」。観光に来た75歳の老婦人に夜の海に輝く夜光虫を見せてあげた際に言われた言葉だそう。たくさんの人生経験をされてきたであろう方でも初めてだという自然が、ここにはある。地域の子どもたちには「ここはただの田舎ではないよ」と言っているというご夫妻からは、地元・伊根への愛と誇りを感じました。

先日、「世界で最も美しい湾クラブ」※への加盟が決まった伊根湾。日本の原風景と美しい海を求め、ぜひ足を伸ばしてしてみたいですか。

※「世界で最も美しい湾クラブ」とは？

…ユネスコが後援するNGOで、湾を活かした観光振興と資源保護、そこに暮らす人々の生活様式や伝統の継承、および景観保全を目的とする（1997年設立、本部フランス・ヴァンヌ市）。モンサンミシェル湾（フランス）などが加盟し、日本では「松島湾」、「富山湾」に次いで、平成28年11月に「宮津・伊根湾」、「駿河湾」の加盟により、計4つとなった。

（舞鶴出張所管財課 国有財産管理官）

掲載している情報は、平成28年12月時点のものです。

掲載している写真は、舟屋の宿 鍵屋、伊根町及び伊根町観光協会よりご提供いただきました。